

平成二十二年 度

問題冊子

国	教
語	科
国	科
語	目
11	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

現代文明社会で活動している人はほとんど例外なく、時間に動かされ、時間をやりくりしながら生活を送っている。時間が足りない、もっと時間がほしい、というのが大方の場合の気持ちだろうけれども、逆に休暇の日などには時間のつぶしかたに困る場合もあるだろう。私たちはときどき、たくさんの仕事をかかえた忙しい人にも、暇すぎて退屈している人にも、時間がまったく平等に与えられていて、しかも自分と誰かとのあいだで時間のやりくりができないことを、この上なく不便で不条理なことだと感じることがある。

時間が足りないと思うときにも、時間をもて余しているときにも、私たちは何回となく時計やカレンダーに目を向ける。そして、もう、こんなに月日や時間が経ったとか、まだ、これだけしか経っていない、というようなカンガイを抱く。

このようにして時計やカレンダーで数字として数えることのできる時間は、そのかぎりでは、いうまでもなく、的な時間である。時計やカレンダーによって目盛ることのできるもの、のことを時間と呼んでいるのだ、といつてもよい。昔ならそれは太陽や月の動き、星座の位置、気象の季節的な変化といった尺度でとらえられていたのだろう。ガリレオやニュートン以来、空間の量と対等な一つの量としての物理学的な時間というものが登場してきた。物理学的な時間というのは、いうまでもなく時計でもって測定される量のことである。相対性理論や量子力学の時代になって、物理学における時間の概念ももはやニュートン物理学のそれではなくなってきた。時計で測られるものをもつて時間とみなすという一点だけは変わっていないのではないかと思う。素粒子には時間がない、というような言いかたも、要するにそこでは時計による測定という行為が成立しない、という意味なのである。

しかし一体、われわれは時計を用いてなにを測定しているのだろう。あるいは、われわれは時計から何を読みとっているのだろう。多くの人は、それはいうまでもなく現在の時刻だ、と答えるだろう。現在の時刻というのは、ある二の時点^①をゼロと定めて、その時点から観測の時点までに通過した時間単位の——つまり時計の目盛りの——数のことである。物理学における時

間の測定が、このような現在の時刻の観測によって行われることはいうまでもない。だから、時計自体は十分に正確だと仮定して、その時計をいつどこで使用しても、目盛りの数と、通過した「時間とみなされているもの」とのあいだには正確な一対一の対応がなくてはならないだろう。つまり、物理学における「時間」はつねにいたるところで等質かつ均速であると考えられるわけである。しかも、目盛りというものはどちらから読んでも同じであるはずだから、それによって計測される量も、本質上は当然逆向きに測定することもできるはずである。

つまり、物理学が時間とみなしているものは、本性上、前後対称的であつて可逆的な連続量のようなものだと考えざるをえない。そこで、物理学の時間に前後非対称な不可逆性が、いいかえれば過去と未来との非互換性が導入されるのは、またそれによつてエントロピー増大の法則が成立するようになるのは、けつして計測量そのものの一次的な性質によるのではなく、観測という行為が二次的に加えた操作によるものなのである。二回の観測が前の観測と後の観測という順序をもっているという、たゞその理由だけのために、そこで観測される「時間」にも不可逆的な前後の方向が与えられてしまう。いつてみれば、物理学が時間とみなしている目盛りの数に前後とか、過去・未来とかの順序が生じるのは、目盛りを読むという作業のためだけなのだし、また目盛りを読む瞬間においてだけなのである。観測行為と観測行為との中間の時期において「時間」がどのような振舞いをしていくかについては、本質的にはなにひとつ言うことができない。

ともかくもこのようにして、物理学者は時計を用いて、前後の順序をもつた一つひとつの現在の時刻を観測し、その値を引き算することによつて、その間にどれだけの「時間」が「流れた」かを計測する。このような時計の使用法、このような時間の読みかたをするのは、もちろん物理学者だけではない。時間を競うスポーツや競技の場合でもこれと同じことをしているわけだし、その他日常生活においてもこの型の時間計測を行う場面もいろいろあるだろう。

しかし、われわれの日常生活の大部分において、われわれが時間を気にして時計に眼をやるとき意識は、この種の物理学的な、あるいはスポーツ競技における時間計測とはかなり違つた種類のものであるように思われる。それは単に、使用する時計の精度や、測定の厳密さの違いだけではない。もつと根本的なところで物理学的な時間計測とは別種の、もう一つの時計の読みか

たが間違ひなく存在する。

*

もう何年ぐらい前になるのか、いわゆるデジタル時計というものが店頭に出現して、わずかのあいだに若い人たちの腕時計がほとんどデジタルに変わってしまった。デジタル時計は正確な上、一目で時刻が読みとれるから、従来のアナログ時計とくらべて格段に便利だろう、というのが使ってみる前の予想だった。ところが、ある程度の年数アナログ型の時計に親しんだのちにデジタルに持ちかえた人なら、恐らく全員がそこに妙な違和感を感じとつたに違ひない。予想に反して、デジタル時計のほうがアナログ時計よりもなんとなく不便なのである。一目で読みとれる数字表示の時刻がどことなく真実味を欠いていて、頭の中でしばらくその数字をぼんやり遊ばせておかないことには時間の実感が生まれてこないのである。

この独特の違和感の本質をよく考えてみると、そこから次のようなことがわかってくる。われわれが日常、時計を用いて時間を読みとる場合、われわれは決して物理学者が時間を観測するのと同じ態度では振舞っていない。われわれが時間を知りたいと思う大部分の場合に、われわれは現在の正確な時刻それ自体を知りたいと思つていてのではなく、ある定められた時刻までに、まだ、どれだけの時間が残されているのか、あるいは逆にある定められた時刻から、もう、どれだけの時間が過ぎたのかを知りたいのである。朝の出勤までにあと何分残っているか、退庁までにあと何時間待たねばならないか、これだけの分量の原稿を書くのにもうどれだけの時間をツイヤシたか、というようなことが気になつて時計を見るのである。デジタル時計だと現在の時刻しか表示されないから、あらかじめ決められている時刻を示す数値とのあいだで引き算をしなくてはならない。アナログ時計の場合だと、二本の針によつてそのつど作られる扇形の空間的な形状とその変化から、この「まだどれだけ」と「もうどれだけ」とを、いわば直観的に見てとることができる。

この「まだどれだけ」と「もうどれだけ」の時間感覚は、二つの数値のあいだの演算によつて与えられる時間の量にはけつしてカインゲンしつくされない、もっと生命的で切実な心の動きである。それは、そのときそのときの局面的な切実さ——たとえば会社に遅刻しそうだとか、試験の解答を全部書けるだろうかとか——を通して、もっと深いところで、われわれの生命そのものの有

限性とどこかで繋がっているに違いないような、直接的な存在感に属しているといつてもよい。われわれの実生活においてデジタル時計の与えてくれるインフオーメーションが、どこか不完全で^④ハイバンで、抽象的であるという感じを伴っているのは、この直接的かつ生命的な存在感が稀薄だということから来るものにちがいない。デジタル型の時計は、いわばわれわれを時間に関する離人症〔注2〕のような状態に置いてしまうのである。

(木村敏『時間と自己』)

〔注〕 1 エントロピー——熱学上の概念で、物質の状態を表す量の一つ。

2 離人症——対象は完全に知覚しながらも、それらと自己との有機的なつながりを実感しえない精神状態。

問一 傍線部ア)とオ)のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「不条理なことだと感じる」とあるが、どのように感じているのか。本文にそって説明せよ。

問三 傍線部②「それ」は何を指しているか。本文中から十字以内で抜き出せ。

問四 傍線部③「過去と未来との非互換性」とあるが、どういうことか。わかりやすく説明せよ。

問五 傍線部④「かなり違った種類のもの」とあるが、どのように違っているのか。本文全体をふまえて説明せよ。

問六 傍線部⑤「われわれの生命そのものの有限性とどこかで繋がっている」とあるが、何が、何と、どのように繋がっているのか。具体的に説明せよ。

〔2〕

次の文章は、志賀直哉の小説「灰色の月」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

東京駅の屋根のなくなった歩廊（注）に立っていると、風はなかったが、冷え冷えとし、着て来た一重外套（ア）で丁度よかった。連（イ）の二人は先に来た上野まわりに乗り、あとは一人、品川まわりを待った。

薄曇りのした空から灰色の月が日本橋側の焼跡をぼんやり照らしていた。月は十日位か、低く、それに何故か近く見えた。八時半頃だが、人が少く、広い歩廊が一層広く感じられた。

遠く電車の頭燈（ヘットライト）が見え、暫（エ）くすると不意に近づいて来た。車内はそれ程込んでいず、私は反対側の入口近くに腰かける事が出来た。右には五十近いもんぺ姿の女がいた。左には少年工と思われる十七八歳の子供が私の方を背にし、座席の端の袖板（スリーブ）がないので、入口の方へ真横を向いて腰かけていた。その子供の顔は入つて来た時、一寸見たが、眼をつぶり、口はだらしなく開けたまま、上体を前後に大きく揺（ユ）っていた。それは揺っているのではなく、身体が前に倒れる、それを起す、又倒れる、それを繰返しているのだ。居睡（いねむり）にしては連続的なのが不気味に感じられた。私は不自然でない程度に子供との間を空けて腰かけていた。

有楽町、新橋では大分込んで来た。買出しの帰りらしい人も何人かいた。二十五六の血色のいい丸顔の若者が背負つて来た特別大きなリュックサックを少年工の横に置き、腰掛に着けて、それに跨（また）ぐようにして立っていた。その背後から、これもリュックサックを背負つた四十位の男が人に押されながら、前の若者を覗（のぞ）くようにして、

「載せてもかまいませんか」と云い、返事を待たず、背中の荷を下ろしにかかった。

「待って下さい。載せられると困るものがあるんです」若者は自分の荷を庇（かば）うようにして男の方へ振返った。

「そうですか。済みませんでした」男は一寸網棚を見上げたが、載せられそうもないので、狭い所で身体を捻（ひね）り、それを又背負つて了った。

若者は気の毒に思つたらしく、私と少年工との間に荷を半分かけて置こうと云つたが、

「いいんですよ。そんなに重くないんですよ。邪魔になるからね。おろそうかと思ったが、いいんですよ」そう云って男は軽く頭を下げた。見ていて、私は気持よく思った。一ト頃とは人の気持も大分変つて来たと思つた。

浜松町、それから品川に来て、降る人もあつたが、乗る人の方が多かつた。少年工は中でも依然身体を大きく揺つていた。

「まあ、なんて面をしてやがんだ」という声があった。それを云つたのは会社員というような四五人の一人だつた。連の皆も一緒に笑いだした。私からは少年工の顔は見えなかつたが、会社員の云いかたが可笑しかつたし、少年工の顔も恐らく可笑しかつたのだから、車内には一寸快活な空氣が出来た。

その時、丸顔の若者はうしろの男を顧み、指先で自分の胃の所を叩きながら、

「一步手前ですよ」と小声で云つた。

男は一寸驚いた風で、黙つて少年工を見ていたが、

「そうですか」と云つた。

笑つた仲間も少し変に思つたらしく、

「病氣かな」

「酔つてるんじゃないのか」

こんな事を云つていたが、一人が、

「そうじゃないらしいよ」と云い、それで皆にも通じたらしく、急に黙つて了つた。

地の悪い工員服の肩は破れ、裏から手拭で縫が当ててある。後前に被つた戦闘帽の廂の下のごれた細い首筋が淋しかった。少年工は身体を揺らなくなつた。そして、窓と入口の間にある一尺程の板張にしきりに頬を擦りつけていた。その様子が如何にも子供らしく、ぼんやりした頭で板張を誰かに仮想し、甘えているのだという風に思われた。

「オィ」前に立つていた大きな男が少年工の肩に手をかけ、「何所まで行くんだ」と訊いた。少年工は返事をしなかつたが、又同

じ事を云われ、

「上野へ行くんだ」と物憂そうに答えた。

「そりゃあ、いけねえ。あべこべに乗っちゃったよ。こりゃあ、渋谷の方へ行く電車だ」

少年工は身体を起こし、窓外を見ようとした時、重心を失い、いきなり、私に倚りかかつて来た。それは不意だったが、後でどうしてそんな事をしたか、不思議に思うのだが、其時は殆ど反射的に倚りかかつて来た少年工の身体を肩で突返した。これは私の気持を全く裏切った動作で、自分でも驚いたが、その倚りかかられた時の少年工の身体の抵抗が余りに少なかった事で一層気の毒な想いをした。私の体重は今、^(注2)十三貫二百匁に減っているが、少年工のそれはそれよりも遙に軽かった。

「東京駅でいたから、乗越して来たんだ。——何所から乗ったんだ」私はうしろから訊いて見た。

少年工はむこうを向いたまま、

「渋谷から乗った」と云った。誰か、

「渋谷からじゃ一トまわりしちゃったよ」と云う者があつた。

少年工は硝子に額をつけ、窓外を見ようとしたが、直ぐやめて、漸く聴きとれる低い声で、

「どうでも、かまわねえや」と云った。

少年工のこの独語は後まで私の心に残った。

近くの乗客達も、もう少年工の事には触れなかつた。どうする事も出来ないと思うのだから。私もその一人で、どうする事も出来ない気持だつた。弁当でも持つていけば自身の気休にやる事も出来るが、金をやったところで、昼間でも駄目かも知れぬ、まして夜九時では食物など得るあてはなかつた。暗澹たる気持のまま渋谷駅で電車を降りた。

昭和二十年十月十六日の事である。

〈注〉 1 歩廊―プラットホーム。

2 十三貫二三百匁―約五十キログラム。

問一 傍線部㉞㉟の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①「不自然でない程度に子供との間を空けて」とあるが、その理由を私の心情に即して推察せよ。

問三 傍線部②「皆にも通じたらしく、急に黙って了った」とあるが、何が「皆にも通じた」のか、またなぜ「急に黙って了った」のか、説明せよ。

問四 傍線部③「私の気持を全く裏切った動作で、自分でも驚いた」とあるが、なぜ「驚いた」のか。車内の人々に対する私の気持ちの推移を考慮しつつ、説明せよ。

問五 傍線部④「昭和二十年十月十六日の事である」とあるが、この表現が作品の最後に置かれていることの効果を、詳しく説明せよ。

〔3〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

園の別当入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出だしたりければ、みな人、別当入道の庖丁を見れば、やと思へども、たやすくうち出でむもいかかとためらひけるを、別当入道さる人にて、この程、百日の鯉を切り侍るを、今日欠き侍るべきにあらず。まげて申し請けむ」とて切られける、いみじくつきつきしく、興ありて、人ども思へりけると、ある人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、おのれはよにうるさく覚ゆるなり。『切りぬべき人なくは、給べ。切らむ』と言ひたらむは、なほよかりなむ。なでふ百日の鯉を切らむぞ」とのたまひたりし、をかく覚えしと、人の語り給ひける、いとをかし。

大方、ふるまひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、まさりたる事なり。客人の饗応なども、ついでをかききやうにとりなしたるも、まことによけれども、ただ、その事となくてとり出でたる、いとよし。人に物を取らせたるも、ついでなくて、「これを奉らむ」といひたる、まことの志なり。惜しむ由して請はれむと思ひ、勝負の負けわざにことつけなどしたる、むつかし。

（『徒然草』）

問一 傍線部 a、e の語句の意味を記せ。

問二 傍線部 ① を口語訳せよ。

問三 傍線部 ② からは、誰の、どのような気持ちが読みとれるか。簡潔に説明せよ。

問四 傍線部 ③、「ふるまひて興ある」「興なくてやすらかなる」とは、どのような行為を指しているか。前段の中から引用せよ。

問五 この作品以前に成立した、同じジャンルに属する作品名とその作者を漢字で記せ。成立順に二つ記すこと。

[4]

次の文章は、秦の始皇帝の宰相となつた李斯の若い時のエピソードである。これを読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送りがなを省いたところがある。)

李斯者、楚^ノ上蔡^ノ人也。年少時、爲^ル郡小吏。見^ル吏舍^ノ廁中、鼠食^ニ

不^レ絜^ニ近^ニ人犬^ニ、數驚^中恐^{スル}之^上。斯入^ル倉觀^下倉中鼠食^ニ積粟^一、居^ニ大廡^之

下、不^レ見^ニ人犬^ノ之憂^ニ。於^レ是李斯乃歎^ク曰、「人之賢不肖、譬^ト如鼠^ノ矣。

在^ル所^ニ自處^ニ耳。」乃從^ニ荀卿^ニ學^ニ帝王之術^一。學已成、度^ハ楚王不^レ足^ラ

事^ヲ。而六國皆弱、無^シ可^ニ爲^ニ建功^者。欲^シ西入^ラ秦、辭^シ於荀卿^ニ曰、「斯

聞^ク得^レ時無^レ怠^ル。今、萬乘方爭時、游^者主^レ事。今、秦王欲^ス吞^ニ天下^一、

稱^シ帝而治^上。此布衣馳騫^ノ之時、而游說者之秋也。處^ニ卑賤之位^一、而

計^ル不^レ爲^者、此禽鹿視^ニ肉人面^一、而能彊^ク行^者耳。故^ニ詬莫^レ大^ニ於卑

賤^一、而悲莫^レ甚^ニ於窮困^一。久處^ニ卑賤之位^一、困苦之地^一、非^レ世而惡^レ利^ヲ、

自^ラ託^{スルハ}ニ於無爲^ニ此非^{ザル}ニ^(注12)士之情^ニ也。故斯將^ニ西^{シテ}說^{カント}秦王^ニ矣。」

(『史記』)

〔注〕 1 上蔡—楚の地名。 2 不絜—不潔と同じ。汚物をいう。 3 大廡—大きな屋根。

4 荀卿—荀子。荀子は当時、楚の蘭陵にいた。 5 六國—齊・楚・燕・韓・魏・趙。

6 萬乘—万乗の君をいい、当時の各諸侯を指す。 7 游者—遊説の士。

8 布衣—爵禄をもたない遊説の士。 9 馳騫—かけまわつて働く。 10 禽鹿—禽獸のことをいう。

11 詬—恥辱。 12 士—遊説の士

問一 傍線部①「人之賢不肖、譬如鼠矣。在所自處耳」をわかりやすく説明せよ。

問二 傍線部②「此禽鹿視肉人面、而能彊行者耳」をわかりやすく説明せよ。

問三 傍線部③「詬莫大於卑賤、而悲莫甚於窮困」を書き下し文にせよ。

問四 傍線部④「得時無怠」は当時の成語であると思われる。李斯はそれをどのように理解しているのか。李斯のことばの全体を

ふまえて考えよ。